

## 痴女魔女ラトウカの諸国放浪記

……まったく、なぜこんなことになってしまったのだろうか。少し時間があればそう考えずにいられない今日この頃である。

私はいま、かつて君臨していた地位から引きずり下ろされて、家畜の身分にまで転落してしまっている。「荷物持ち」。それがいまの私の立場だ。家令でもなく、執事でもなく、護衛でもなく、ましてや使用人でも召使いでもなく、単に重たい荷物を持って運ぶという身分は、はっきり言って、かつての自分からは想像もできなかった姿であり、本当に泣きたくなることさえある今日この頃だ。

では、なぜ私がこのような目に遭っているかという点、理由は至極単純である。戦いに負けたからだ。私を家畜のような「荷物持ち」として扱ういまの「ご主人様」に。

いま思い出しても泣けてくる話だが、私は自らの居城にて、乗り込んできたいまの「ご主人様」を迎え討った。

乗り込んできた彼女の姿を見て、最初はこの女、頭がおかしいのかと思った。そして戦いを挑まれた時、思わず笑ってしまった。やはりこの女は頭がおかしいのだと思ったし、簡単に勝てるだろうと思ったからだ。ひと捻りでねじ伏せられるだろうとさえも思った。ゆえに、いまとなつてはまことに恥ずかしい話だが、乗り込んできた彼女に向かって大言を吐いたのである。

「くくくく。我を討伐するだと？ 抜かしたな、身の程知らずの小娘が。よかろう、やれるものならやってみるがよい。ただし、お主が負けた場合には、その姿にふさわしい罰をくれてやる。我が部下どもの慰み物として、一生、この城の地下で家畜として飼ってやるわ！ そこで己の愚かさを悔いながら地獄を味わうがよい！」

すると、私が「小娘」と罵ったその女は、顔に愛らしい笑みを浮かべて言ったのである。

「いいよ、それで。あたしが負けたらそうしてあげる。性家畜でも性奴隷でも肉便器にでもなんでもなあってあげるね。でも、あたしが勝ったら、あなたがそうなるんだからね」

……かくして、現在にいたるわけである。

絶対に勝てると思っていた私は、その予想に反して手も足もせず、完膚なきまでに叩きのめされて、本当に「家畜」の身分に落とされてしまったのである。まったく「口は災いの元」とはよくいったものだ。

「はあ……」

過去の自分を振り返り、現在の自分を顧みて、なんと落ちぶれたものだと思わずにいられない。はっきり言ってみじめだ。もし過去に戻れるならば、あの時に戻ってやり直したい。そしてあの時、大言を吐いた自分を叱ってやるのだ。そうすれば、何かが変わるかもしれないから。まあ、所詮、むりな話だが……。

「はあ……」

そう思いつつ、またため息を吐いたその時である。

私の前を歩く主人が立ち止まって振り返り、私の方を見た。美しく、それでいて愛らしい顔が、私の視界の中に入ってきた。

「どうしたの、そんなにため息を吐いて？　もうすぐ目的地だけど、もしかして疲れたの？　もし疲れたなら、ちょっと休む？」

優しい声が鼓膜を突いた。それは悪意のない、心の底から私の身を案じた声だった。

私は姿勢を正した。

「いえ、なんでもありません。大丈夫です。それよりも、目的地が近いのならば先を急ぎませう。事態は急を要するのでしょうか？　早く行って、助けてあげるべきです」

完全に臣下の態度と言葉遣いで進言する。

それを聞いて、主人がニパツと笑った。

「うん、そうだね。ゴブリンに捕まってる女の人たちは、きっといまでも凄く酷い目に遭ってるはずだから、早く助けてあげないと可愛そうだもんね。君もたまには言いこと言うんだね。あたし、見直しちゃった。褒めてあげるね。えらい、えらい」

「……あ、ありがとう、ございます……」

胃に穴が開きそうな心的負担に苛まれながら、私はわざとらしく礼を述べ、頭を下げた。苦虫をまとめて百匹ほど嘔み潰したような表情を隠すために。

しかし、いかに屈辱的に思っても、私はもう二度と、この女に齒向かうつもりはない。この女——自他共に認める大魔法使いのラトウカ・ルイゼンガラン・エルカテリーナ・フォンデ・シュタイン・ウイル・エルバキア・ザ・シュトラトフ・ファインサル・クルルトギア・ルイーナ・デル・シュトロンプルルカには。この嫌がらせのように長い名前の女には！

続きは本編でお愉しみてください。